発表②

「助詞「は」と「が」に見る無意識と意識」」

E. TOGTUUN

モンゴル国立大学

日本語を学習していく際に、助詞「は」と「が」の使い分けは複雑である。また、教える側もそう簡単に説明できたりはしない。例えば、「は」のことを、そのテキストの主題を表すというふうに説明されるケースは多いが、「が」もまた、そのように使われない訳でもない。日本語の変容の歴史を見てみると、助詞として、「て、に、を、は」はあるが、「が」はなかったことが分かる。つまり、「が」は後になってできた助詞ではないかと考えられる。ここで、「は」と「が」の関係がどのようなものであるかを理解するために、読解を通して把握することに試みた。

読解は、やはり百聞一見にしかずである。特に、外国語を勉強するに当たっては、文章に目を通すことはなくてはならない動作であるといっても過言ではないと思われる。初級段階においては、読解によって、単語や言葉の正しい表記が再確認され、文章の構成が理解され、自己認識ができる。そのため、その結果が励みになり、さらに続けていこうという意志が生まれる。中級段階に進化していくと、文章の内容を理解するだけではなく、そこにある記号やシンボルなどを通して、その国の国民性、文化などに関する知識も得られるようになる。

読解の対象となる文を構成しているすべての表記、例えば、単語、段落、句読点などにはそれぞれ意味が含まれている。段落はそのテキストがいくつの内容を含んでいるかを教えてくれる。句読点は文章の区切りや強調したがっているところなどを読者に伝えてくれる。そのために、句読点までも一字として数えられているのである。これが書かれていないと、読者は迷子のようになってしまう。このように、文章には様々な情報が隠れている。

文章の構成にはなくてはならないものの一つは助詞である。つまり、単語だけでは文は成り立たない。なぜなら、単語はものとことを表現する記号に過ぎないからである。私たちは、文は単語や言葉によって成立していると思い込んで、助詞や助動詞、相づち言葉などを無視する傾向が見られる。しかし、文章の命、つまり、その文章を通して、自分の意思、意見、価値観などを表そうとしている人の心は、まさにそれらの助詞、助動詞、相づち言葉などに反映されているわけである。そのため、今回はこのような句、詞の中なから「は」と「が」に限って、発表をまとめて行きたい。

ここで主題として取り上げた「は」と「が」は、柴谷方良[(1)]が言うように、それ自体がある事物や動作・状態を指さない、という理由で言葉・単語という区分に入れられていない。なのに、それ無しでは、我々が伝えようとする意味や心は十分に表現されない。つまり、言葉だけでは、それを通して、その物・こと・状が何であるかを分かる。が、それ以上の情報、合図については、何も把握されない。

「は」と「が」に関する先行研究を見ると、それには、助詞の機能という面からは、「は」は係助詞、「が」は格助詞に属し、同レベルで取り扱われていなかった。しかし 1970 年代以後の研究では、「は」と「が」を対比させていることが見られる。これらの助詞を何を原因にして対比しているのかを探ってみると、そこに述べられている情報、つまり主体が既知であるか、未知[(2)]であるかということと関連付けていることが分かった。さらに、既知は「は」と、未知は「が」と連結されるそうだ。

そうすると、私たちはテキストにおける「は」や「が」を通して、その著者の考え方、つまり日本人の思考について分かるようになる。つまり、日本人が何を既知と理解し、また何が彼らにとって未知の物事なのかといった原型像を見ることができる。しかし、その既知といわれているものはいったい何なのか、それを人間はいつ、どのようにして取得するのか、また、それがいつも既知のままで永遠に存在するのか、未知とは何を指すのかという質問が次から次へと沸いてくるに違いない。

既に知っているもの、つまり旧い情報とは何でしょう。知っているということをどのようにして意識しているのでしょう。またそれがどうして「は」として表にあらわれているのでしょう。心理学者たちの研究によって、人々の日常生活の 8 割はインスティンクトにより指導されていることが既に判明されている。つまり、ほどんど無意識的に行動しているということになる。だから、無意識のそこから出てくるその言動を既知と決め付けているのかもしれない。また、既に存在しているのに、その人だけに気づかれていない事物・動作・状態がその人によって発見・発明されるとそれが未知として捉えられているのではないでしょうか。ここから考慮してみると、無意識の「は」が全体性をもち、意識の「が」が部分性を持っている可能性がある。なぜなら、「は」は既知の情報なので必ずしも特別な場面や場所を必要としないのに(りんごは落ちる)、「が」は発明・発見によって現れるのでそこには場面や場所の設定が義務付けられる(りんごが落ちる)といった特徴をもっているように思われるからである。

読解を通して、「は」と「が」の意味を以上のように理解することができれば、それらの使い分けにややこしさをいだいている学習者に少しでも便利になるのではないかと思われる。

注記

(1) 「助詞の意味と機能について ー「は」と「が」を中心に」柴谷方良

(2) 「日本語格助詞の意義素試論」国広哲弥;「日本の言語学」第 5 巻き意味・語彙